

# 7月の技術対策（水稻）

平成18年7月1日  
J A きたそらち・J A 北いぶき  
空知農業改良普及センター北空知支所

## 1 幼穂形成期から出穂始までの水管理

(1) 不稔を防止するためには幼穂形成期から約20日間の水管理がカギとなります。表1を参考にして適切な深水管理により水温を確保し幼穂を保護して下さい。

入水は水温確保のために日照が期待できる日の夜間から早朝に実施し、昼夜は止水として下さい。また、急激な水深の増加や日中の入水・かけ流しは水温を低下させるので避けましょう。

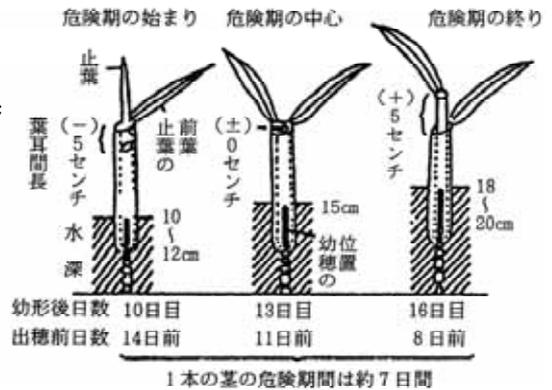


図1 冷害危険期の見分け方(1977 斉藤)

表1 前歴期間～冷害危険期の水管理

時期 ( )内は目安	水深 水見板等を使用して確認する	水管理の注意事項
前歴期間 (幼形期より約10日間)	最大水深10cm (幼形期を確認したら1回当たり2～3cmを目安に徐々に水深を増加)	畦畔にゆるみや漏水がないか点検する。
冷害危険期 (前歴期間から続く7～10日間)	最大水深18～20cm (主茎の葉耳間長が-5cmとなったら徐々に水深を増加)	葉耳間長が-5cm～+5cmの期間が冷害危険期(図1参照)。 80%程度の茎の葉耳間長が+5cm(危険期終了)となるまで継続する。

(2) 冷害危険期終了後は中干しを行い、根に活力を与えましょう。中干しは冷害危険期終了後から出穂直前までの間に実施します。併せて5～10m間隔で溝切りを行うと登熟期間の走り水や収穫に向けた落水がスムーズになります。

**ただし、冷害危険期終了後も低温が継続した場合は、中干しを行わないで下さい。**

(3) 出穂始となったら入水し、間断灌漑(まず浅水にして、ほ場にヒビ割れが入る前に入水する)を行って下さい。

## 2 病虫害防除

表2 いもち病とカメムシの防除

対象病虫害	7月			8月	
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬
いもち病	予防剤の茎葉散布 (いもち病の発生が懸念されるほ場)		出穂期	出穂期後 7～10日 (発生状況による)	
カメムシ			出穂期	出穂期後 7～10日	予察結果に基づき判断

地域で栽培基準が決まっている場合は定められた薬剤を使用しましょう。  
また栽培管理台帳の記入を正確に行ってください。

### (1) いもち病

ア 出穂期の防除は、節・穂いもちの感染防止のため必ず実施して下さい。

イ いもち病の発生が懸念されるほ場で、薬剤の育苗箱施用や水面施用剤を散布できなかった場合は、7/10～7/15頃に予防剤の茎葉散布を検討して下さい。

〔いもち病の発生が懸念されるほ場〕

過去にいもち病が発生したことのあるほ場  
生育量が大きく、葉色の濃いほ場（特に、ほしのゆめ、ななつぼし）  
建物の陰、沢地帯など風当たりの弱いほ場

ウ 葉いもち病の発生予察を実施しましょう。

例年発生しやすい水田を重点的に観察し、発生を確認したら5～7日間隔で防除を行いましょう。予察にあたっては、病害虫防除所のホームページで公開されている「BLASTAM情報（葉いもち病発生予測システム）」を参考にして下さい。

病害虫防除所ホームページ <http://www.agri.pref.hokkaido.jp/boujoshou/index.html>

〔BLASTAM情報に基づく葉いもち病発生予察〕

BLASTAM情報より、近隣市町も含めて発生好適日や準好適日を確認する  
発生好適日、準好適日があったら、その7～10日後に予察を行う  
予察は、発生しやすい水田で1畦10m×4か所を調査する

(2) カメムシ（アサゲホドリスミカ）

ア 水田への飛び込みが集中する出穂期とその7～10日後は必ず防除しましょう。

イ 出穂期の防除までに畦畔や雑草地等の雑草刈取りを実施して下さい。

ウ 捕虫網によるカメムシすくい取り調査を行い、臨機防除の要否を判断する材料として下さい。

（但し、最終的な防除の要否は基幹防除後の水田内すくい取り結果で判断します）

### 3 ドリフト軽減対策（剤型別）

農薬散布時のドリフトによる問題発生を避けるために、周辺の生産者との連携（周辺への周知や近隣ハウスの扉を閉めてもらう等）を図ると共に、次の点に注意して下さい。

剤型	注 意 事 項
粒剤	粒剤はドリフトの可能性が低いですが、噴頭を畦畔方向に向けて無造作に散布したり、強風時に散布すると10m程度ドリフトすることがあるので注意する。
液剤	できるだけ風のない時に行い、 <b>原則として風速3m/秒</b> （木の葉が揺れる、顔に風を感じる程度の風） <b>以上では散布しない</b> 。また散布は周辺他作物が風上にあるときに行う。風速計を積極的に利用する。 稲体との距離が離れすぎたり、散布圧力を高めすぎると飛散しやすくなるため散布は適正な位置、圧力、散布量を確認しながら行う。必要に応じてドリフト低減ノズルの導入も検討する。 〔畦畔ノズル〕ドリフトを生じやすいので、遠くに飛ばそうとしてノズルの角度を上げすぎたり、むやみに振り回さないようにする。 〔乗用管理機〕畦畔ノズルよりドリフトは少なくなるが、散布位置が稲体の先端から30～40cm以上離れないように注意する。 〔無人ヘリ〕機種毎の散布基準を遵守すると共に、他作物が栽培されているほ場に対して平行散布を行い、他作物に向かって散布飛行しない。また散布しながら機体の引き起こし・旋回操作は絶対に行わない。 散布後はタンクとホースの洗浄を確実に（散布前の点検も必ず行う）。
粉剤	粉剤は液剤よりも風の影響を受けやすく、100mほどドリフトすることがある。また散布後しばらくは粒子が株間を漂うため、これらが風にあおられて二次的にドリフトする可能性もあることから対策を講じることは困難である。やむを得ず散布する場合は、 <b>6月の定期情報を参考にして十分に注意して行う</b> 。